

漫画という新興文芸形式の

上海における発展の軌跡

大野 公賀

本書は、雑誌『上海漫画』の創刊八〇周年を記念して、二〇〇八年二月から三月に上海図書館が開催した「老上海漫画館蔵文献展」の一環として刊行されたものである。上海図書館の公式サイトによると、同展では同館所蔵の二〇〇種余りの上海近代漫画史に関する資料のうち、当時の漫画界に特に大きな影響を与えた漫画家の資料や作品、刊行物を展示し、観衆に「漫画という新興の文芸形式の近代上海における発展の軌跡」を紹介したという (<http://www.library.sh.cn/news/1.asp?id=947> : 二〇一一年四月一日参照)。

本書はこのような趣旨に基づき、清末から中華人民共和国建国前後の上海における漫画の歴史を豊富な図版で詳細かつ

系統的に論じたもので、上海漫画史としてのみならず、文化史としても楽しめる好著である。

さて、中国で最初に「漫画」という名称が用いられたのは一九〇四年(清光緒三〇年)のことで、上海の『警鐘日報』(三月二七日)に掲載された風刺画に「時事漫画」という言葉が添えられている。しかし「漫画」という名称と作品が一般に定着するには更に二〇年近い年月が必要であった。そのために尽力したのが張聿光や沈泊塵、丁悚、但杜宇ら、いわゆる第一世代の漫画家である。

人々は彼らの作品を通じて「漫画」という新しい形式に慣れ親しんでいった訳であるが、その背景には上海の文化的成熟がある。当時上海では映画や演劇をは

上海図書館編
老上海漫画図誌



上海科学技術文献出版社
2010年 [4998円]

じめ、新しい表現形式の文学や絵画、音楽など、海外の影響を受けた文化が様々に入り乱れ、人々はそれらを追求し、享受していた。まさに文化の坩堝とも言うべき当時の上海で、「漫画」が中国で最初に受容され、発展したのは極めて当然のことであった。換言するならば、当時の上海にはそのための条件、つまり漫画家・読者・編集者および出版者、そして彼らをつなぐジャーナリズムといった、漫画の普及に不可欠な要素がすべて揃っていたのである。

本書では、中国史上初の漫画家団体として、一九二六年二月に上海で結成された「漫画会」とその同人の活動を軸に、



「漫画界全体明星大会申」1935年、巖折西（本書163頁）

上海漫画の変遷が時系列的に論じられている。日中戦争で漫画家の多くが上海を離れるまでは、上海が中国漫画界の中心であり、その牽引力となったのが漫画会とその同人である。漫画会については、これまでの中国漫画史でも言及されてきたが、実態についてはあまり明らかにされていない。漫画会に関する詳細な叙述は本書の特徴の一つである。

漫画会の中核として活躍したのは第二

世代の黄文農や葉淺予、魯少飛らである。第一世代の丁悚や張光宇は、後見人として彼らの指導に当たった。一九一〇年代から漫画の創作を始めた丁悚に比べ、張光宇の漫画家としてのデビューは一〇年ほど遅れるが、第一世代の中でも最初期の漫画家である張聿光の弟子として高い技術を有しており、丁悚と並んで第二世代の漫画家の尊敬を集めた。彼らは、多くの第二世代とは異り、外資系煙草会社の美術広告室勤務という定職に就き、裕福な生活をおくっており、自宅を漫画会の会場として提供するなど、経済面でも漫画会を支えた。

漫画会のブレインとして、同会の発展のために様々なアイデアを提供したのは王敦慶である。王敦慶は一九二三年に上海セント・ジョーンズ大学を卒業すると、上海芸術大学文学教授や中華芸術大学美術教授、文学団体創造社の美術編集などを務める一方、漫画の創作に従事し、また得意の英語や日本語を活かして海外の漫画作品や漫画に関する資料を多数翻

■高麗美術館 花卉草蟲（かきぞうちゅう）

——花と虫で綴る朝鮮美術展

高麗美術館所蔵の草虫図を中心に、朝鮮時代中期から後期の絵画と工芸品、それらと関係性が認められる中国の絵画も展示。

▼7月16日（土）～8月28日（日）10～17時（※入館は16時半まで）＊月曜休館。祝日と重なる場合は開館し翌日休館▼一般八〇〇円／大高生五〇〇円／中学生以下無料
▼高麗美術館（京都市北区紫竹上岸町一五番地）☎07549111192／FAX 0754953718 URL <http://www.koryomuseum.or.jp/>

■静嘉堂文庫美術館

日本における辞書の歩み

——知の森への道をたどる

中国の辞書の影響を受けて、平安時代中期（西暦九〇〇年頃）に成立した漢和辞書『新撰字鏡』を始め、中世の国語辞書や江戸時代の英和・蘭和辞書、また百科事典的性格をもつものなど、平安時代から江戸時代までに作られた辞書約60点を展示。

▼6月25日（土）～7月31日（日）10時～16時30分（入館は16時まで）＊月曜休館。但し7月18日は開館、7月19日（休）休館▼一般八〇〇円／大高生五〇〇円／中学生以下無料▼静嘉堂文庫美術館（東京都世田谷区岡本二二三—）☎03-37000007／URL <http://www.seikado.or.jp/index.html>

訳、紹介した。王敦慶は一九三〇年には左翼美術団体の時代美術社、中国左翼作家連盟にも加入している。

漫画会の機関誌『上海漫画』の創刊も王敦慶の提案によるが、王と共に同誌の編集を担当したのは黄文農と葉浅予である。同誌は試験的に刊行された後、一旦中断し、一九二八年四月に正式に創刊された。それに伴い、編集責任者は王敦慶から出資者の張光宇へと変わった。『上海漫画』では漫画以外にも随筆や評論、翻訳なども掲載していたが、投稿者は漫画会同人に限定されていた。

張光宇は『上海漫画』の編集に関わる一方で、より総合的な美術雑誌として、当時流行していた画報の刊行を企画した。これを支持したのが詩人の邵洵美である。邵洵美は金屋書店や新月書店の経営者としてそれまでも多くの雑誌を出版していたが、張光宇の考えに賛同して時代図書公司を設立し、一九二九年一月に『時代画報』が創刊された。同誌の編集には張光宇の他に張正宇や葉浅予、

作家の葉靈鳳らが参加している。『上海漫画』は『時代画報』第四期以降、同誌に合併され、一九三〇年六月第一一〇期をもって廃刊となった。『上海漫画』で人気を博していた葉浅予の漫画『王先生』シリーズや似顔絵、風俗漫画も『時代画報』に引き継がれた。

この合併後、漫画の描ける人材の育成を目的に、時代図書公司には「漫画通信教育部」が設置され、『時代画報』を通じて受講生を募集した。『上海漫画』が漫画会の機関誌として、同人の作品だけを掲載していたのに比べると、この措置は『時代画報』と漫画会の距離を感じさせる。しかし、これはまた一方で、漫画が当時それだけ広く一般に普及し、漫画家と読者の双方の層が厚くなったことの証とも言えよう。

一九三〇年代上海では雑誌が大量に創刊、出版されたが、中でも漫画雑誌は群を抜いていた。一九三四年から日中戦争の勃発する一九三七年までの間に創刊された漫画雑誌は二〇種類以上にも及ぶと

いう。こうした状況下、上海漫画界の中心的存在として活躍したのは張光宇や魯少飛、葉浅予、王敦慶ら、漫画会同人を中心とした第二世代の漫画家に加えて、彼らの漫画に刺激を受け、一九三〇年代以降に漫画の創作を始めた汪子美、丁聰、張樂平、陸志庠、華君武ら、第三世代である。

一九三七年以降、漫画会は「中華全国漫画作家協会」および、その下部組織「上海漫画界救亡協会」へと名称を変えながら活動を続けた。抗戦期から終戦後の国共内戦期にかけて、抵抗の手段として漫画を中国全域に普及させた点の特筆に値すると言えよう。また一九二〇年代後半から独自の叙情漫画で人気を博していた豊子愷は、漫画会には発足当初から参加していなかったが、抗戦期には重慶などで彼らと活動を共にしている。同一の目的に向かって、漫画会は当時の中国漫画界を集結させる役割をも担っていたのである。

尚、かつては中国で最初に「漫画」と

いう名称を用いたのは豊子愷であるとして、豊を「漫画の始祖」とする説が一般的であったが、前述のように、現在ではそれ以前に既に用いられていたことが明らかにされている。また豊子愷の作品を「漫画」と名付けたのは豊自身ではなく、編集者の鄭振鐸である。

さて、本書ではまた、これまでの漫画史ではあまり論じられることのなかった漫画家についても詳しく紹介している。

例えば漫画会第二世代の万籟鳴や陳秋草は、漫画映画や美術教育の方面でも才能を発揮し、中華人民共和国の建国以降はそれぞれ美術映画の製作や美術研究所の設立に従事した。また一九三〇年代に『時代漫画』や『上海漫画』などで活躍した嚴折西は、漫画以外にも音楽や演劇の才能に優れ、映画音楽や流行曲を多く作曲し、映画にも出演している。同じく一九三〇年代、都会の優美な女性像で一世を風靡した張英超は富裕な資産家で、実業家としても活躍していた。その作品は現在見ても洗練されていて美しい。張英超

は作風も生活スタイルも当時の漫画界ではかなり異質な存在であったが、漫画会同人らと親しく交際し、多くの作品を残した。またオーストリア人画家フリードリッヒ・シフ (Friedrich Schif) は一九三〇年から一九四七年まで上海に滞在し、当時の上海の風景や風俗を油絵や水彩画、漫画で表現した。こうした異色の漫画家の存在と活動には、当時の中国漫画界、さらには文化界の厚みと多様性を実感させられる。

本書は時系列に全六章で構成されているが、最終章は第三世代漫画家の張樂平とその代表作「三毛」シリーズに焦点を当てている。同シリーズは日中戦争により孤児となった少年、三毛を主人公に、時代毎に背景やテーマ、登場人物を変えつつ、一九三五年から一九八〇年代後半まで創作が続けられた。また一九四九年の映画化を皮切りに、人形劇や演劇、テレビドラマやアニメーションとして、張樂平の逝去した現在も広く愛されている。一九三〇年代当時、ストーリー漫画と

しては「三毛」以外にも前述の「王先生」や、黄堯の「牛鼻子」、当時唯一の女性漫画家であった梁白波の「蜜蜂小姐」などのシリーズがあり、いずれも高い人気を誇っていた。その中で「三毛」だけが五十年近くも描かれ続けた理由としてはタイトル以外に文字がなく、主人公が子どもであることから、子どもにも人気があったこと、また子どもの純粋な目で社会の矛盾に疑問を呈するという手法が大人の読者の共感を生んだこと、そして中華人民共和国の建国にあたり三毛のキャラクター設定の変革に成功したことなどが指摘できよう。

「三毛」シリーズは一九三〇年代から現在までの中国社会の理想と現実を知る上で極めて貴重な資料でもある。それはまた、すべての漫画に言えることでもある。その意味において上海漫画の出現から全盛期、そして現在までの変遷を詳細に綴った本書も読者に多くの示唆を与えてくれることであろう。

(おおの・きみか 東京大学東洋文化研究所)